

新潮文庫

男と女の中

源氏鶏太著



新潮社



おとこ おんな よ なか
男と女の世の中

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草118 M

昭和四十五年十月二十日 発行
昭和四十八年八月十日 八刷

著 者
源 氏 鶏 太

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七一
電話 東京 (〇三) (二六〇) 二一一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

男と女の世の中

源 氏 鶏 太 著



1949

男と女の世の中

病 氣

一

信濃^{しなの}浩太郎は、まどろみからさめた。先ず、気がついたのは、家の中がいやに深閑^{しんかん}としていることだった。

尤も、五〇坪もある家に、平常から父親と息子^{むすこ}、それに女中を加えての三人で住んでいるのである。いつだって、ひっそりしていた。かりに賑^{にぎ}やかなことがあるとすれば、息子の浩介が、酔っぱらって友達を連れて帰り、傍若無人^{ぼうじやくにん}に振る舞うときぐらいであつたろう。ただし、そういう場合でも、浩太郎は、父親として、一切文句をいわないことにしている。あんまりうるさく感じられ、我慢が出来なくなったら自分で家を出て行くだけである。

そういうとき、ただ黙々として散歩していようが、夜の銀座へ車を走らせようが、あるいは、適当に女を電話で呼び出して、代々木へのホテルでひとときを過しても、浩太郎の勝手であつた。そういうことについて、いちばんとやかくいう女房が、浩太郎には、七年前からいないのである。

浩太郎は、四十七歳であつた。浩介は、二十三歳であつた。そして、浩太郎は、世間に相当名

の知られたグラフィック・デザイナーであり、浩介は、この四月に大学を卒業して、化粧品会社に勤めていた。

浩太郎の事務所は、東銀座にあった。毎日、目黒の家からその事務所へ出かけるようにしているのだが、今日は、起きたときから気分がすぐれず、すこし寒気がするので、とうとう休んでしまった。めったにないことなのである。

不安になって、昼過ぎに近くの医者に来て貰った。熱は、三十八度あった。

「風邪ですよ」

医者がいった。二、三日、安静にしていた方がいいですよ、とつけ加えた。

女中に薬を貰いにやり、それを飲んで寝たのが、三時半頃であつたろうか。今は、四時半頃である。一時間ほどまどろんだわけだが、とにかく熱に浮かされて、いろいろの夢ばかりを見ていたようだ。その大部分は、忘れてしまったが、中で忘れられないのは、死んだ細君が出て来たことである。

亡くなった七年前から二、三年は、よく細君の夢を見たものだが、この一年間ほどは、そういうことが絶えていたのだ。

その細君のことを、浩太郎は、

（良妻であつたかも知れないが、しかし、悪妻でもあつた）

と、思い込んでいた。

良妻であつたのは、家庭的であり、お料理がうまく、綺麗好きだつたからだが、悪妻であつたというのは、多分に気分屋的な傾向にあり、ヤキモチ焼きであつたからなのだ。

浩太郎は、商売柄夜の交際がすくなくなかった。が、細君の必要以上のヤキモチには、閉口させられた。それを取りなすのに、どんなに苦勞させられたことか。

浩太郎が、まだ働き盛りでありながら、その後、再婚しないでいるのは、浩介に、継母の思いを味わわせたくないとの父親ごろのほかに、

(もう女房には、懲り懲りだ)

との思いもまじっていたらう。

女房には、でなく、女房のヒスとヤキモチには、と訂正した方が、もっと実感がわく筈である。そういう浩太郎に、友人たちは、

「君ほど幸せな男はいないよ」

と、しんそこから羨ましそうにいうだけでなく、

「目ざわりになるから、早く再婚してくれないか」

と、催促がましくいうのだ。

浩太郎は、ニヤニヤと笑っているだけである。

「このまま、一生、再婚しないつもりか」

「とも決めているない。息子が一人前になったら、考えてみるかもわからない。ただし、たよ」

「ただし？」

「美人で、身体がよく、しかも、ヒスを起さず、あんまりヤキモチも焼かない女がいたならのとだ」

「バカだなア」

友人たちは、憐憫の目で浩太郎を見て、

「世の中には、美人で、身体がいい女は、たくさんいる。しかし、ヒスを起さず、ヤキモチも焼かぬ女なんて、めったにいるもんか。いや、絶対にいないと断言出来るね」

と、いうのである。

「だったら、再婚なんて面倒なことをしないでだけだ。僕は、今のままで、何んの不自由も感じていないのだからね」

浩太郎は、そう答えてやると、友人たちは、決っていまいましそうな顔をしたものだ。

ところで、浩太郎が見た夢というのは、悪妻の方でなく、良妻の方であったのである。やっばり、今日のように風邪をひいて、寝込んだときのことらしいのだ。細君は、憂え顔で浩太郎の額を氷のうで冷やしてくれた。そしてまた、真冬であるのに、洗面所で氷のうに入れる氷を一所懸命に砕いているいじらしい姿でもあった……。

（今頃になって、妙な夢を見たものだ）

浩太郎は、そう思ったが、場合が場合だけに、変な気にさせられたこともたしかであった。熱に浮かされた浩太郎は、誰かにそういう世話をして貰いたかったのかもわからないのである。欲求不満からの夢……。

さっき、女中に頼んで、額に冷たくしたタオルを置いて貰ったのである。が、そのタオルは、なま温かくなつて横へずり落ちていた。身体中が汗ばんでいるし、熱が更に高くなっているような気がした。

浩太郎は、枕許の体温計を腋の下にはさんだ。窓の外の空は、秋のものだった。そろそろ暮れ

の気配を漂わせているようで、物哀^{ものかな}しい。家の中は、いぜんとして、物音一つしなかった。浩太郎は、体温計を取り出した。

「三十八度七分！」

この分では、まだまだ上りそうで、今夜が心細かった。せめて、この汗ばんで気持ちの悪い寝巻でも取り換えたかった。ついでに、すっかりぬるくなっている枕許の洗面器の水を新しいのに入れ換えたかった。

「おい」

浩太郎は、呼んでみた。しかし、返辞がなかった。こんどは、もっと大きい声で、

「おい、咲ちゃん」

と、呼んだ。

が、やっぱり、返辞がないのである。晩ごはんのために、何か買いに行ったのかもわからない。そう思いつつ、

（こんな病人を一人で残しておいて）

と、腹が立った。

しかし、浩太郎には、自分で寝巻や洗面器の水を換える元気がなかった。かりに、そんなことをしたら、ますます病気を悪くするだけであろう。苦しくとも、気持ちが悪くとも、このまま、じいっとしているのほかはないのである。自分の吐く息が、熱っぽいような気がしていた。全身がだるく、自分の身体でないようだ。窓の外の遠い雲は、すこしずつ動いていく。それを見つめながら、浩太郎は、いっそううら哀しい気分に襲われていた。

二

医者から、

「風邪ですよ」

と、いわれたとき、浩太郎がとっさに思い出したのは、春日勝子のことだった。

春日勝子は、銀座のバー「かすが」のマダムであった。たしか三十二歳で、それほどの美人ではないが、身体の良い女なのである。一口にいえば、熟しきっている感じなのだ。

浩太郎は、かねてからこの女を悪くないと思っていた。勝子の方でも、浩太郎を憎からぬ男と思っていたらしいのだ。浩太郎は、昨夜、「かすが」で看板まで飲んでいて、結局、勝子と二人っきりになり、

「送って頂戴」

と、勝子からいわれたのであった。

「いいとも」

二人とも相当に酔うていた。浩太郎は、自動車を勝子の住んでいる新宿に向けておいて、その肩を抱き、

「送り賃を払って貰おう」

と、唇を求めた。

「あら、キスぐらいでいいの？」

勝子は、酔うてとろんとした目を浩太郎に向けて来た。妙に、欲情をそそるようなしぐさにな

つていた。浩太郎は、生ツバをぐくんと飲みたくなったほどであった。

「勿論、物足りないがね」

「だったら、いっそ、どうお？」

「いいのかい？」

「いいにも悪いにも、あたしの方でいい出したんだから。ただし、ね」

「何んだ」

「あくまで、大人の浮気よ」

「勿論」

「誰にも、絶対に内緒よ」

「勿論」

「いっぺんきりよ」

「勿論」

「あとを引かないでね」

「勿論」

自動車は、千駄ヶ谷に向けられた。

ホテルを出たのが、午前一時半頃になっていたろうか。生憎あいにくの雨になっていた。二人とも雨具の用意をしていなかった。しかも、雨は、しだいにひどくなってくるのである。二人は、タクシーを待った。しかし、なかなかやってこなかった。

雨に打たれながら、浩太郎は、いつものことだが、あるむなしさにとらわれていた。早く、一

人になりたかった。

「信濃さんて、相当な人だったのね」

勝子は、満ち足りたようにいった。ひととき前のことをうっとり思い出しているようないい方でもあった。

「見直したかね」

「あたし、カブトを脱いだわ」

「では、明日から大威張りで、銀座の店へ行けるわけだな」

「来て頂戴ね」

勝子は、肩を寄せて来た。それによって、浩太郎は、雨が肌^{はだ}にまで廻っているのを感じさせられた。うっかりすると、風邪を引くかもわからないぞ、と思ったのである。しかし、勝子の方は、ちょうど持っていたビニールの風呂敷を頭からかぶっているせいか、雨のことをそれほど、気にしていないようであった。寧ろ、後味^{あとあじ}を噛^かみしめて、浮き浮きしている気配すら感じさせられた。

時計を見ると、午前二時に近くなっていた。浩太郎が、今から家へ帰ると、どうしても午前二時半になるだろう。

（もし、女房が生きていたら、大変なことになるところだ）

何故^{なぜ}なら、細君が生きていた頃の門限^{かどかぎ}は、午前一時と決っていたのである。それを一分でも過ぎると、鍵^{かぎ}をかけられてしまったり、仏頂面^{ぶつちやうめん}で詰問されたり、したものだ。

しかし、今は、何時に帰ろうが、誰からも文句をいわれないのだ。尤^{もと}も、浩太郎は、なるべく

家を空けないようにしている。女中には、午後十時に寝ていいといつてある。浩介は、かりに自分の部屋で起きていても、わざわざ顔を出すような真似はしない。たまには、翌朝になって、

「親父さん。ゆうべは、遅かったらしいね」

と、いうことがあるくらいなのである。

その浩介だって、結構、十二時過ぎに帰ってくることもあるのだ。

やっと、タクシーが来た。浩太郎は、びしょ濡れになっていることが気持ち悪かったが、それを我慢して、先に、勝子を送り、そのあと家へ帰ったのであった。

風呂にも入り、念のために、風邪薬を飲んで寝たのだが、とうとう、こういう結果になってしまったのである。

三

枕許の電話のベルが鳴った。電話は玄関横のホールに置いてあるのだが、浩太郎が寝ているときにかかってくる場合にそなえて寝室に切換えられるようにしてあるのだ。女中が外出に際して、気を利かしたつもりで、切換えておいたのだろう。

（よけいなことをしやアがる）

浩太郎は、もうどんな電話にも出たくなかった。それほど辛く、それほど大儀になっていた。要するに、昨夜の報酬なのだが、まさかこういうひどいことになるうとは思わなかった。さっき見た細君の夢が思い出されてくる。

（女房が生きていたら、こういう目に合わずにすんだんだった）

身勝手な理屈であつたが、そのときの浩太郎の実感であることには間違いがなかった。

電話のベルは、しつこく鳴り続けている。しかも、枕許でなのである。頭にガンガンひびいてくるようだ。浩太郎は、とうとう我慢出来なくなつて、腕を延ばして、受話器を取った。

「もしもし、信濃さんでしょうか」

どこかで聞いたような女の声であつた。

「そうですよ」

「あら、信濃さん？ あたし、よ」

「……………」

「勝子……………」

「ああ」

「あら、どうかなさつたの？ 元気がないわね。昨夜のお疲れ？」

浩太郎は、バカ野郎、といたいいのをこらえて、

「風邪を引いてしまったんだよ」

「まア、大変。熱があるの？」

「三十九度」

「三十九度！」

勝子は、さすがに呼吸を飲んだようだ。

「今夜中に四十度になるかもわからない」

「脅かさないでよ」

「何か、用だったのか」

「いえね、ちょっと、お声が聞きたくなくて、銀座の事務所の方へ電話をしたらお休みだと聞いたもんだから」

「……………」

「医者に診てお貰いになったの？」

「ああ」

「誰か、看護する人がいるの？」

「今は、誰もいないんだよ」

「まア、どうしてよ」

「息子は会社だ。女中は、何処へ行ったのか、たった一人で寝ているんだよ」

「あたし、可哀そうだわ」

「だって、仕方がないじゃアないか」

「でも、心細いんでしょう？」

「……………」

「あたしでよかったら、これから看護に行って上げましょうか」

「お店があるじゃアないか」

「一晩ぐらいかまわないのよ」

「まア、遠慮しておこう」

「どうしてなのよ」